報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目	中世日本人による『孝経』注釈書の研究
氏　　名	石丸 羽菜

論　文　内　容　の　要　旨

本論は、中世日本人の撰述した『孝経』注釈書を読み解くことで、中世日本の『孝経』受容の具体相を明らかにすることを目指すものであり、二部六章で構成される。

第一部「清原家『孝経』抄物の本文系統の整理と考察」では、中世日本儒学の主たる担い手であった清原氏の『孝経』抄物の本文系統の整理をおこなう。第一章「清原家『孝経』抄物の主要四系統について」は、現存する清家抄物のうち者本数の多く主立った四つの本文系統について、各系統の性質や同一系統内の写本どうしの関係などを考察するものである。第二章「天理大学附属天理図書館所蔵・吉田兼右筆『孝経抄』について」では、未紹介写本であった兼右筆『孝経抄』をその他の清家抄物と比較することで、注釈内容のほぼ同じ本文系統が存在すること、しかし固有の特性もあることを明らかにした。第三章「大内山仁和寺所蔵『古文孝経聞書』について」は、前章同様の手法により、仁和寺所蔵『古文孝経聞書』の本文をほぼ包含する本文系統が存在すること、またそれ以外の本文系統とも共通する注釈があることなどを明らかにするものである。

第二部「中世日本人による『孝経』注釈書」では、第一部の資料整理にもとづき、抄物をはじめとした中世日本人による『孝経』注釈書を読み解き、中世日本における『孝経』受容の諸相を検討した。第四章「『孝経』抄物にみえる独自の注釈」は、清家・清家外の『孝経』抄物にみえる独自の注釈のうち、他書を利用して経伝の読み替えや文意を附加する注釈、仏教思想を用いた注釈、君臣関係や「忠」について述べる注釈について考察し、その結果として、こうした独自注釈がなされた背景には制作者の受容者への意識があるのではないかという卑見を呈するものである。第五章「清原家『孝経』抄物にみえる四つの「不読」」では、清家抄物に「不読」とされる経伝の字句を取りあげ、清家外の抄物やそれに類する資料、経伝本にも同様の記載がみられること、また近世にも「不読」が取り沙汰されていたことを示した。第六章「中世日本人撰述『孝経直解』小考」では、中世日本人撰述の『孝経直解』について巻二「正義」を中

心に検討をしたところ、巻二「正義」は鎌倉から南北朝時代に日本で著された仏教書と似た内容がみられるために、『直解』は従来推定されたとおりの成立事情である可能性が高いこと、江戸の儒者たちのように巻二「正義」を卑俗な内容とみたために巻二「正義」を欠いた可能性があることを述べた。

結章では、本論をふまえて近世日本における『孝経』の状況へ目を向け、中世から近世へのつながりを小考するとともに、本論の反省と今後の課題・展望を述べた。